



教育開発推進機構 NEWSLETTER

# 教育開発ニュース

VOL. 3  
NEWSLETTER

KOKUGAKUIN University 平成23年(2011)1月12日

## 目次

- 学修支援センター開設1年！—現状と課題—  
学修支援センター発足1年の歩みとこれから  
学修支援センター長 柴崎 和夫 ..... 2p  
学修支援センター相談室における学生相談の現状と課題  
—いかに学生と向き合うか—  
学修支援センター助教 鈴木 崇義 ..... 4p
- 特集「授業をどうする～歩みはじめた人間開発学部FDの現状と課題～」  
人間開発学部長 新富 康央 ..... 8p
- 第Ⅲ期SA座談会～学生視点で大学授業を考える～ ..... 16p
- シリーズ「大学授業最前線—教員の努力！学生のまなざし！（3）—」  
教員の授業努力 黒崎浩行（神道文化学部准教授、「神社ネットワーク論」担当） ..... 20p  
受講学生からのコメント ..... 21p
- 國學院大學教育開発推進機構彙報（平成22年6月1日～平成23年1月31日） ..... 23p
- 教育開発推進機構 新任教員紹介 ..... 24p
- ぞったくどうじ  
● 啖啄同時—編集後記— ..... 24p

写真：SA(スチューデント・アシスタント)トライアル(第Ⅱ期)報告会 平成22年7月30日

# 学修支援センター開設1年！

## —現状と課題—

学生の学びや悩みに向き合いながら、その成長を見守って行くという学修支援の仕事は、地味ながらも、教育機関として大学があるかぎり必須のものとなっています。本学でも平成21年4月、教育開発推進機構のなかに学修支援センターを設置し、同年秋から学生に対する学修支援業務を本格的に開始しました。それからはや1年。学修支援センターはいかに学生支援に取り組み、また、今後、どのような活動を目指してゆくのでしょうか。以上について学修支援センター長の柴崎和夫教授と、同センター助教の鈴木崇義助教に、学修支援センターの現状と課題について紹介してもらいました。

### 学修支援センター発足1年の 歩みとこれから

学修支援センター長  
人間開発学部教授

柴崎 和夫



#### 1) はじめに

学修支援センターが実質的に相談業務の活動を開始したのは、昨年の後期からである。3号館が完成し、現在の相談室である3306室に拠点を設置して、実際の相談業務が可能になったからである。学修支援センター自身は、昨年度に教育開発推進機構が発足したときに同時に設置されている。しかし、そのときには相談可能な部屋が存在しなかったため、実際に学生からの相談を受け付けることはできなかった。そこで、昨年度前期は、センターはどんな業務をどのように遂行していくかを皆で議論し、文字通りの手探り状態が続いた。特にそのときに議論されたのは、学修支援とはなにか、というセンターの根本となる事項であった。センターを設置してから、センター業務の根本事項について議論するというのは、ま

さに「泥縄」というか、本末転倒の事態であったが、それが事実である。

時間に関係せずに常時修学相談を受け付ける、というのは國學院大學にとって、初めての試みである。学生に支援が必要な状況が存在することは、修学相談などに携わった教員達のなかではほぼ共通の認識となっていたが、では具体的に何をしたらよいのか、が判然としない。学生が相談に訪れるのを待てば良い、では不十分だが、では具体的にどのような方策がとれるか。実際に相談に来ない（来られない）学生の支援をどのように実施するか、などと議論をかさねていたのである。

#### 2) 助走期間 - 平成21年度後期

後期になって、部屋が確保できたからといって、すぐに相談が軌道に乗る訳ではない。学生もすぐに相談に訪れる訳でもない。担当する教員・職員にも何から手をつけたらよいか、はっきりとはしないという状況もある。もちろん、前期にも活動はしていたので、全くの一から始めたわけではなかったのであるが、何を優先順位の最初にもってくるかが難しい事態であった。だが、嘆いてばかりいてもはじまらないので、とりあえず出来ることを考えて始めることにした。大まかに優先順位を付け、できる仕事に見通しをつけた。それは、

- 1) 学生への周知（広報）活動の展開
- 2) 教職員への周知活動の実施
- 3) 学部・学科で実施する修学相談に来談しない者への働きかけ
- 4) 機構教職員による相談体制の確立
- 5) 教務課との連携方法の検討
- 6) 学生相談室との連携の検討
- 7) 相談室のレイアウト検討
- 8) 学生相談記録フォーマット制作
- 9) 学生生活課、キャリアサポート課との連携のあり方検討
- 10) その他適宜に

といったところであった。まずは土台を固める作業であ

る。実際に、昨年度後期においては自ら相談にやってくる学生は少なかった。まだ、学修支援センターそのものが周知されていないのだから、それも当然である。突然、「相談にきませんか？」とメールをもらっても、無視されてしまったと思う。

だが、教務課職員や教員にセンターや相談室業務を知ってもらうことが、少しずつ効果を上げてきたと考えている。教務課に様々な相談に訪れる学生や、授業を受けている学生に相談室のことを伝えてもらい、来談を促してもらうことで、学生にも相談室の存在が知られるようになってきたのである。

また、学年末には、卒業延期となった学生の実態調査（アンケート）も試みた。これは学生の就職氷河期といわれる中で、就職できずに（不本意だが）留年した学生の実態を知りたいとの意図であった。アンケートの回答者は多くはなかったが、このような調査も、広義には学修支援の一環か、という思いは湧いた。

### 3) 定常業務へ向けて -平成22年度前期

4月は忙しく始まった。センターとして大きな変化は、新規職員が2名（ベテランと新人）、センター専任として配属されたことである。これに昨年度の当初からセンターで活躍してくれていた職員1名とあわせ、機構としても学修支援センターとしても、事務体制が確立した。職員側の体制が固まったことは、今後のセンター業務遂行のうえで大きな一歩である。

さて、まず取りかかったのは、履修登録をする学生への手助けである。学生がまず最初は、適切な履修登録、つまりは学修方針、が定まらない（考えられない）ということである。これは新入生にとっては本当に大切である。だが今回は、新入生は基本的にエルダーサポーターの学生に任せ、センターは過年度生（つまりは留年生）を集中的にサポートすることにした。もちろん、相談室に来談した者には、すべて相談に応じた。

センターでは、過年度生に積極的にアプローチ（メール等で来談を呼びかけた）を試みた。その結果、通常の相談も含め、センターの相談室には大渋滞が出来た。対応した職員・教員は大変であった。だが、そこから明らかになったこともある。やはり、過年度生には過年度生になる理由があった、というごく当たり前の事実を確認したことである。大学外での活動のために学業がおろ

そかになった者は、経済的な事情を含めても、数少ない。学修意欲があまりみられず、後どのくらいがんばらなければ卒業できないかも、自覚していない（ように思える）学生が多かったのである。卒業したいと口では言っている、自分では満足に自分の時間割さえも組めない（何年も大学にいたのに！）状態である。自らの状況に切迫感が感じられない学生が大部分である。つまりは、ここに至る前に手当てすることが大変重要であることを、理解したのである。鉄は熱いうちに打つことこそ有効なのである。まずは1年、2年を集中的に支援することが今後重要であると確認した。

その後は、5月連休明けに、出席が不良になった学生への来談要請、修学相談未来談者への働きかけ、過年度生への継続的支援（出席をチェックして尻をたたく！）、と仕事が続いた。自ら来談する学生も徐々に増加してきた。センターの業務としては軌道に乗ってきたともいえる状況だが、問題点もでてきた。そのひとつは、予期されたことであるが、精神的な問題を抱える学生が定期的に来談するようになり、センターがいわゆる保健室の役割を果たさざるを得なくなってきたことである。また一方で、SA制度の運用が始まり、SAの学生がセンターに多く出入りするようになったことである。ただでさえ広くない相談室がもっと狭く感じられるようになり、相談スペースが圧迫されるようになったのである。

問題点を抱えながらも、走り始めた学修支援センターは、当初の目的である学生支援に向けて一定の地歩を築きつつある、というのが今年度前半までの自己評価である。

### 4) 平成22年度後期、そしてこれから

後期も履修登録学生、修学相談未来談者への対応など、通常業務をこなしながら、よりよい学修支援とは何かを教職員一同が考え続けている。大学生に学修支援など、20年前なら一笑に付されたかもしれない。しかし、この一年を経験して、支援を必要とする学生が確かに存在する。いや、もっと強くいえば、支援なしでは充実した学生生活を送れない学生が確実にいる、ことを痛感した。社会的責務として、大学は受け入れた学生の卒業（成長）に責任があるのである。安易な自己責任の言葉で突き放すことは、実際には許されない状況であることを、大学のすべての教職員（特に教員）に理解してもらいたい。学修支援センターの責任は重大である。

さて、今後のセンターが責任を全うするためには、まず、相談スペースの問題がある。やはり、現状では不十分である。倍程度の広さがほしい。さらに、教職員と相談スペースの分離が必要である。個人情報保護の観点からもこれは実現したい。また、相談に携わる者のスキルアップが重要である。やはり、カウンセリングのスキルを持った者が一人でも、相談に携わる体制が必要であろう。

早い段階での、問題を抱えた学生の抽出が大切であるので、日々の授業の中でどのようにそれらの学生を見いだすかを考える必要がある。これには、出席率の恒常的チェック体制の構築が課題である。問題を抱えた学生と、講義をする教員との仲介に関してもまだ、ノウハウが決定的にかけており、今後の課題となろう。保護者からの相談が少しずつ出てきているので、若木育成会との連携も考える必要が出てくると思える。いわゆる学生カルテ、一人一人の学生の相談履歴、の整備も緊急課題である。

障がい者支援も業務の一環だが、広汎性発達障害、LD、ADHD、等の高次脳機能障がいを持つ学生への対処も今後増加していくことを考えておく必要がある。

さて、課題も多いが、学修支援センターの仕事は、今後國學院大學のなかで非常に重要な業務になることは間違いない。学内のすべての方々との緊密な協力体制を構築して、真の学修支援、学生支援ができるよう、皆様の理解と協力をお願いしたい。

## 学修支援センター相談室における 学生相談の現状と課題 —いかに学生と向き合うか—

学修支援センター助教

鈴木 崇義



### 1) はじめに

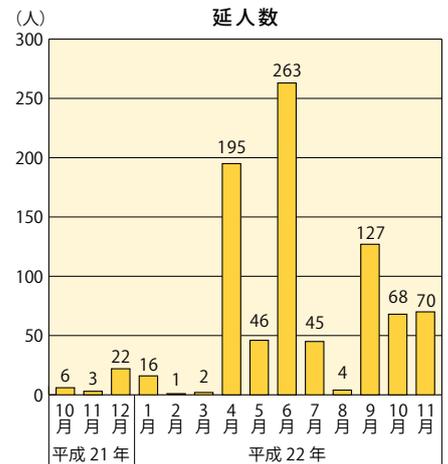
國學院大學渋谷キャンパス3号館3306室にある学修支援センター相談室（以下、相談室）は、平成21年9月の3号館竣工にともない、同年10月に開室した。以降、月曜日から金曜日の10:00から18:00まで、随時学生の相談を行っている。相談室が開室して1年が過ぎよう

としている今、これまでの学生との相談を振り返り、学生・学修支援がいかになされるべきかの展望を示したい。

### 2) 学修支援センター相談室設置から現在まで

相談室開室当初は、3号館という新校舎に置かれたこと、また、学生

への周知活動の不十分さもあって半ば開店休業状態であった。しかし、今年度4月のオリエンテーションの期間になると、新入生が履修登録の相談や質問にやってくるよう



になった。他にも、過年度生の旧規程科目登録を受け付けたことにより、多くの相談者を得た。その後は、教務部が成績不良者に対して行っている修学相談に来なかった学生に対して、別途相談室から呼びかけを行い、学修面の相談を行っている。このような学生に対する働きかけの結果、これまでの相談人数はおよそ860人（延人数）という数値を出した。また、グラフに見えるように4月、6月と9月は突出して人数が多いが、これは4月と9月は学期始めの履修相談に多くの学生が訪れたこと、6月は修学相談未来談者の追い掛けの呼び出しを行った結果、この一年間で最も多い来談者数を記録したことによる。一方、相談人「数」としてはなかなか見えてこないが、定期的に相談室を訪れる学生や、また、相談室から定期的に呼びかけを行って面談をしている学生もいる。彼らの中には、相談室にやってきたことにより学生生活の活路を見出だした学生や、相談室を中継地点にして授業に行くことができるようになった学生がおり、これは継続的に支援が行える相談室という場所が出来た成果だと思う。そこで今回は、大きく履修相談と個別の相談の二つにわけて、これまでの相談を行っての所感を述べてみたい。

### 3) 履修登録は大学での学びのはじめの一歩

本学では4月になると新入生はもちろんのこと、各学

年・各学部学科で履修ガイダンスを行っている。しかし、近年の履修登録システムは選択の自由度が高まったことにより複雑にもなり、中には何をどのように履修したらよいのかを戸惑う学生もいる。彼らは個人差はあれどもだいたい同じような点でつまづくので、それぞれのポイントについて、相談室での面談を通して感じた注意点を以下に挙げていこう。

#### 4) 専門科目と教養総合科目

最初に、各学年における履修についてであるが、大学の授業には、大きく専門科目と教養総合科目がある。専門科目は、自身が所属する学部学科の専門領域を深めるための科目であり、教養総合科目は語学や神道科目を含めた、幅広い知識の取得とその活用能力を高めるための科目である。つまり専門科目は、4年間を通じてそれぞれ関連性があり、学年があがっていくにつれてその専門性が深まった内容の科目を受講できるようになっている。一方の教養総合科目は、各授業の中で内容が完結し、それぞれの授業ごとに関連性は（結果的に結びつく内容の授業があるかもしれないが）無い。よって、専門科目は学年ごとに導入・基礎から応用・発展へと段階を追って履修するのが望ましく、教養総合科目は各人の興味に従いつつ、履修可能単位数内で適宜履修するのが望ましい。これについて各学年の目安を示すと次のようになる。

1年生は、専門科目内の必修基礎科目が、また語学科目も併せて指定されているので、さほど選択の自由は少ないように思われる。特に、前期においても履修単位数制限がかけられているため、履修可能単位数がわずかしかない。授業を選ぶという経験を初めてする学生も多いだろうから、指定科目以外は1年生で履修できる専門科目を履修し、なるべく早めに自身が専門とする内容について知っておくといいだろう。また、希望優先科目、事前登録科目等の登録締切が早めに設定されている科目もあるので、履修登録期間が始まったら、早めに登録を済ませるのがいいだろう。2年生になると、2年次開講の専門科目と語学科目が指定されているだけなので、1年次に比べて選択の自由度は高まっている。もし、1年次に履修した専門科目を落としていたら、2年次で確実に履修し、今度こそ単位数取得できるよう奮起を促したい。なぜなら、1、2年次に開講している専門科目が各専門の基礎を養う内容になっているからである。専門科目は



学年があがるにつれてだんだん内容を深めていくようになっていっているので、導入、基礎の段階を最初に学修しておく必要がある。また、2年次には教職等の資格課程も本格的に開始されるので、専門科目も資格取得に必要な授業を適宜履修していくことが望ましいだろう。3年生は順当に単位数取得をしていけば専門科目は応用・発展科目へと進んでいくから、自身の専門性をより深める内容の授業を選択するといいたいだろう。また、教養総合科目は2年生修了時か3年生前期までには要卒単位数の36単位数以上を取り終えているだろうから、興味関心のある教養総合科目以外は専門科目を積極的に履修することを勧めたい。ただし、3年次までに取得単位数が少ないと感じた場合、あせって3年次開講の専門科目や教養総合科目でいたずらに単位数を稼ごうとせず、1、2年次開講の基礎科目（特に必修科目）を履修してほしい。4年生になれば、おそらく大半の学生は要卒単位数を満たしているだろうから、自身の興味関心に基づき、あるいは卒業論文等に関連する科目を履修するといいたいだろう。また、必修科目等の取り落としがないかのチェックも十分に行い、確実に卒業できるよう注意してほしい。

#### 5) 時間割の組み方

次に、時間割の組み方、履修登録についてであるが、多くの学生は前期と後期では、前期に多めに授業を登録しているようである。なるべく早めに単位数取得を済ませてしまいたいという気持ちはわからないでもないが、あまり前期にかたよって授業を集中させてしまうと、単位レポートや試験も集中してしまい、準備が間に合わずに結局単位を落としてしまうということになりかねない。前期で落とした(D判定)、または履修放棄した(R判定)単位数は、後期の登録可能単位数に加算されないため、前期後期でバランスよく無理のない時間割を組むことが、確実に単位を取得するための方策といえよう。他にも、履修相談を受けてい

て学生が作成した時間割を見てみると、中には本当に一週間過ごせるのだろうか？と疑問に思うようなものがある。たとえば、1限から7限まで隙間無く授業をいれていたり、7限まで授業がある日の翌日1限に授業を入れたり……。相談室では、こういった時間割を持ってきた学生に対し、一週間のサイクルをシミュレーションさせ、「本当にこの時間割で一週間過ごせるの？」「この時間割が13週くらい続くんだよ？」と問いかけ、不用意な履修登録を避けさせるよう努めている。それにしても、なぜ学生は平気でこんな時間割を組んでしまうのだろうか。思うに、履修登録期間は新学期であり、学生も意欲に燃えているので「何でもできる」ような感覚に陥っているのだろう。また、前年度成績が思わしくなかった学生は「今度こそ！」と思うのであろう。それで、勢い余って後先を考えない無理な履修登録をしてしまうのではないだろうか。しかし、組んだ時間割はその後4ヶ月の生活サイクルを決定するものであるということを、十分考慮に入れなければならない。もっとも、履修を希望する授業の時間等により、多少ごちな



い時間割になることもあるだろうから、杓子定規にバランスを追求する必要はないので、以上のことは参考程度に考えてほしい。

## 6) 各学年の取得単位数の目安

では、次に各学年において目標とすべき取得単位数について述べてみよう。これはあくまで要卒単位数の124単位を4年間でどのような段階を経て取得すべきかを、これまで行った相談内容をふまえて示したものである。あくまで目安としてとらえてほしい。

### ・1年終了時

理想的：40単位以上  
最低限：30単位以上  
危険：30単位未満

### ・2年終了時

理想的：80単位前後  
最低限：60単位以上  
危険：60単位未満

### ・3年終了時

理想的：120単位以上  
最低限：100単位以上  
危険：90単位未満

「理想的」とした単位数は、実は多くの学生はきちんと取得している（できる）単位数であり、実際にはより多くの単位を取得している学生もいることだろう。この単位数を順調に取得していけば、3年次で卒業の見込みが立ち、就職活動や教員採用試験の準備等に時間を費やすことが出来る。続く「最低限」としたのは、4年間で124単位をほぼ均等に振り分け、無理のない時間割を組んだ場合であり、極論すれば卒業だけはできるだろうという単位数である。「危険」としたのは、卒業が危ぶまれる単位数である。「1年生や2年生から卒業が危険なんて」、と思うかもしれないが、成績不振の学生はよほど奮起して継続的な努力を続けられない限り、前年度の遅れを挽回するのは難しい。仮に、2年生までに40単位しか取得できなかった学生がいたとしよう。この学生があと2年で84単位以上を取得できるだろうか。あるいは可能かもしれないが、そのためには相当な努力が必要になる。というのは、その学生は2年生までに40単位しかとれないような学生生活を送ってきたからである。残りの2年間で84単位以上取得しようとすれば、学修面のみならず生活習慣から見直さなければならない。いずれにせよ、相談室では学生一人一人の単位取得状況等を参照しながら、じっくりと相談に応じるので、不安や疑問があればいつでも来てほしい。

## 7) 共通領域科目について

最後に、相談を受けた際に質問が多く出された共通領域についても触れておきたい。印象的だったのが、「共通領域科目も必修なんですよ？」という質問である。共通領域科目は謂わば他学部他学科の学生でも受講できる専門科目であり、必修科目ではない。副専攻を選択していると、その副専攻を修了するために必要な科目が共通領域科目にあるかもしれないが、副専攻も必修ではないので、特に希望していないのであれば共通領域について

は科目の選択は勧めず、専門科目と教養総合科目に注意を払うよう話している。ただし、中には自身の専門科目以外は全て教養総合科目だと勘違いしている学生もあり、教養総合科目を履修したつもりで共通領域科目を履修していたというケースも散見する。こういった、誤解による履修間違いを事前に防ぐよう、相談室においては注意をしているが、履修登録の際には自分が登録した科目が専門科目なのか、教養総合科目なのか、または共通領域科目（つまり他学部他学科の専門科目）なのかを、シラバスや時間割表等をしっかり参照して確認してほしい。

## 8) 個別の相談について

個別の相談については、修学相談未来談者への呼びかけに応じてやってきたケースと、学生自ら相談相手を求めてやってきたケースに大きく分かれる。前者は、出席が芳しくない結果、成績不振に陥った学生がほとんどである。この中にはいわゆるサボりの学生もいるが、メンタル面での困難により、大学に来たくても来られない、授業に出たくても出られないという学生も見られた。後者は、不本意入学とそれに関連しての転部（科）について、また、単位取得不足による卒業への不安等から相談にやってきた学生、自身が行うべき手続きを学内のどの部署で行えばよいのかを質問に来る学生がいる。

前者の学生については、生活習慣の見直しについて指導したり、メンタル面の困難を聞いた上で、学部学科の教員と連携を取りながらその学生が授業に出るためのケア等を考えている。後者に関しては、たとえ不本意入学であったとしても、本学に在籍している以上は、可能な限り学内における居場所をその学生が見つけられるように、と思って相談に当たっている。転部（科）希望については、転部（科）を希望する理由を細かく聞いた上で、本人の意志がかたいようであれば学部の教員に相談するよう促すこともある。いずれにしても、安易に進路変更を行わせるのではなく、本人にとって一番良い選択ができるよう時間をかけて相談を行っている。また、1年生の時にほとんど単位を取得せずにいたが、2年生からやり直したいという希望を持って相談に来る学生もいた。4月に彼らと相談した時は、いったいどこまでがんばってくれるだろうか、という不安も無いではなかった。しかし、9月になって、彼らが成績通知書を持って後期の履修相談に訪れたとき、その不安は杞憂に終わった。彼

らは力及ばなかった科目もあったにせよ、1年次に比べたら見違えるほどの成績を見せてくれたのだ。これは我々にとっても大きな喜びであった。もちろん、同級生に比べたら一年近い遅れがある以上油断はできないが、彼らはそんな一抹の不安さえ吹き飛ばすような充実感に包まれていた。彼らの今後の活躍に大いに期待したい。

## 9) おわりに

以上、相談室開室からの一年を振り返ってみた。今後の課題は、今までも心がけてきたつもりであるし、これからも心がけていくことであるが、相談に訪れた学生に対して適切な対応・ケアをとるために、現在の体制で可能なことならば何でもやってみようというチャレンジ精神を持ち続けることである。しかしそれは、学生が望むものを与えるというのではなく、学生本人が自分で考え、選択し、社会に巣立っていく準備をするために少しだけ"後押し"をするという程度のものである。いわゆる自立を促す支援ということになるだろうか。もっとも、我々相談室のスタッフもまだまだ手探りの状態で、不安も多いというのが正直なところではある。最善を尽くす努力をしても思いが通じないこともあった。しかし、相談は時間がかかるものである。学生に対しては、こうだと決めつけたり、思いこみで相談に当たってはいけなし、また、自立を促すという名目で強引に相談を打ち切ることもしてはならない。学生自身が問題を解決するために、相談を通じてアドバイスをするのが支援なのだ。我々は、相談に当たって学生がどう行動したらよいのかを絶えず考えるが、最終的に行動を起こすのは相談に来た学生自身である。そこには当然相談室に相談に来ることも含まれているだろうが、相談室は行動を起こす場所ではない。いかにして行動を起こすかを模索する場所なのである。もし、これを読んでいるあなたが行動を起こせずに悩んでいるのであれば、ぜひ、相談に来てください。一緒に考えていきましょう。



# 特集 「授業をどうする

## ～歩みはじめた人間開発学部FDの現状と課題～

人間開発学部発足から1年が過ぎました。この間、同学部では全教員あがりの組織的なFD活動が行われてきましたが、それはいかに展開され、そして、どのような課題が浮かび上がってきたのでしょうか。平成22年6月9日に開催された、教育開発センター主催の研究会「教育開発懇話会」において、人間開発学部の新富康央学部長に、同学部におけるFDの取組みとその成果、今後の課題と展望についてお話をいただきました。

人間開発学部長

新富 康央



### ■はじめに

人間開発学部は昨年4月に立ち上がりました。とは言え、1年目は、赤ちゃんにたとえれば、言わば這い這いの状態——無邪気に、動けることが嬉しくて動いているという感じでした。2年目に入り、今や掴まり立ちを始めた状況と言えます。ですから、今日の懇話会は、立ち上がった姿を親御さん（先輩学部の先生方）に見ていただいてエールを送ってもらおうような、そんな場であると考えています。各学部の先生方や、職員の皆さんに支えられて、今日こういう話ができるようになったのは大変嬉しいことです。私たちもまだまだ訳もわからず動いているような状況ですので、皆さんから多様で、多面的なサジェスションをいただければと思っています。

### ■「FD」の意味

FD (Faculty Development) という概念は、今でこそ市民権を得ましたけれども、10年前、私が他大学で副学長等を務めておりました時分には、先生方から官吏の強権の代表のように捉えられて反発さえ受けました。授業改善の論議についても、「冗談じゃない、自分たちは研究者であり、教育はサービスだ」という空気でした。

ところが今は、FDと言えば「仕方ないか、当然だな」という受け取りかたをされるようになりましたから、ずいぶん状況は変わりました。けれども、実際はFDが当

たり前、必然となったのです。というのも、今や学生たちの姿が昔とは全く異なってきているからです。私は、「植物園から動物園へ」の変異と言っています。

かつては、高校までの「生徒」が大学に入り「学生」になると「俺たちは俺たちでやるのだ」という感じになり、むしろ手を貸さなくともよかったです。けれども20年くらい前からでしょうか、そういうあり方が変わってきました。先生に対しても、高校のホームルームの先生に対するように、ある意味べたべたと話しかけてくる。私たちが学生だった頃は、たとえば懇親会等で酒を飲んだときに、先生がちょっと長く居座ると「何だこいつは、わかってねえな」と。今で言う「空気が読めない」先生だと見られたのです。ところが、今や学生のほうから「先生、来てくれ」と本気で依頼が来るようになった。

ところが、そういう空気があるというのに、大学の先生方は「先生をしましよ」と言う反発する。そんな状況が、この前まであったのです。

ただ、それには無理もない面もあるのです。FDというのは元々アメリカで始まったのですが、アメリカではそれが必然となる根拠がありました。それがファカルティ（教授団組織）とスクール（教育組織）の関係です。アメリカが容易に、どんどん大学の教育組織を再編成、改組を可能にしているのは、文学部や法学部といったファカルティと、教育組織すなわちスクールとを区別することが可能だからです。

たとえば仮に「総合社会学部」というようなものを新設しなければならないというときには、「法学部からはどの専門の何先生が、経済学部からはどの専門の何先生が、人間開発学部からはどの専門の何先生が出て、総合社会学部という教育組織を作りましょう」ということになります。もちろん教員は、ファカルティのほうでも自分の研究を耕すことは自由で、たとえば法学部の教員は法学をどんどん研究していただいてよい。けれども「総合社会学部」とか「現代社会学部」とか、そういうところで教えるということになりますと、ファカルティでの内容や方法をそのまま使うわけにはいきません。そこで、

スクールで教育を行うために改めて腕（教育スキル）を磨かなければならないということになる。つまり、ここにおいて「スクールの教員としての自分」「教育組織のなかでの自分」という認識が出てくるわけです。

日本では教養教育について比較的似た事情があります。各学部から派遣された先生方が、学部専門の授業とは別に「教養とは何か、学生にどういう支援をすべきか」ということを考えつつ講義するわけですね。ですから教養部では、ある程度真剣にFDということを考える側面があったと思うのです。アメリカではFDは当たり前で、FDなくして教員にはなれないという側面があります。

もうひとつ、大学就学前教育の脆弱なアメリカの場合は、教養部での授業のあり方がかなり異なるということがあります。たとえば、私たちが大学生の頃流行った映画に『ある愛の詩』というのがありますが、そのなかにハーバード大学の授業風景が出てきます。まるで高校の授業のような感じで、「1897年に何の法律ができたかね」「そのときの大統領、長官の名前は」「その長官はどういうことをやったか」と、どんどん学生を指名してゆくのです。つまり、「フランス革命1789年」と解答できる学生が3ないし4分の1という状態で、基礎教育をゼロから始める。日本の場合、学生は受験を経てきますから、むしろ、彼らが把握している知見と概念を崩すことから始めなければならないこともあります。アメリカではそういうお国の事情もあって、大学における「教育力」が問われてきたのは、確かですね。

更に加え、日本は学歴社会ですが、アメリカは「資格社会」です。たとえば、なぜハーバード大学ビジネススクールが高評価かと言えば、高度な国際商業ビジネスの資格などが取得できるからランキングの上位に位置づけられるということであり、取得率が下がると、当然の結果としてランキングはすぐに落ちてしまいます。

日本は学歴社会と言われてはいますが、要は大学の看



板さえ持って帰ればよい社会というわけです。ミッキーマウス・サブジェクト（所謂「楽勝科目」）をどんどん取って、とにかく単位を集めさえすれば、力をつけていなくてもいい。けれども、アメリカでは資格を取らなければいけないから、だらだらした授業をしていると学生が机を叩いて「早くやれ」と抗議する。休講が1回でもあるとすぐ事務室に苦情が来るわけですね。「自動車学校論」という言葉でしばしば説明するのですが、自動車学校というのはそうですよね。10回の講座を「講師の都合で8回にしたい」ということになれば「授業料を返せ」となる。アメリカはそこがはっきりしているわけです。

そういうわけで、アメリカの場合にはFDというものが登場してくるだけの理由が確かにあったのですが、日本では「FDとはフロッピーディスクかいな？」と揶揄されても、これまでは無理もない面があったと言えます。しかし、今や日本でも、アメリカとはまた別の理由で、FDに真剣に取り組む必要が出てきたのです。

## ■「ゆとり世代」とFD

たとえば、私は授業の初回に、「リアクション・レポート」と題して、学生に考えていることを書かせているのですが、初等教育学科で100人中5人くらいの学生が「私たちはゆとり世代です。先生にいくら期待されても、不良品なのでから」というようなことを書いて来ました。完全週休2日制実施以降の学生を「ゆとり世代」というのだそうです。彼らは、マスコミが「ゆとり教育の欠陥」などと言うことを繰り返すものなので、勘違いして、「自分への自信」(中教審報告書)を無くしているのです。

しかし、マスコミが言っているのは間違いなのです。本来「ゆとり教育」が目指したのは、「確かな学力」の確保、「基礎・基本の定着」ということです。「定着」とは発展的学力というもの志向されていて、そのための「基礎・基本」を身に付けるということです。したがって、むしろ高度な思考能力の育成への取組を目指そうとしているのです。思考力・判断力・技能・表現力を育成し、主体的に考えて「僕はこう思う (I think)」と言える人間を養成すること、それこそが本来の「ゆとり教育」なのです。その際に教える内容を「厳選」し、ボリュームを減らした。それが非難されることになったようです。

しかし、私から言えば「燃焼と爆発とはどう違うのか」あるいは「物理的反応と化学的反応とはどう違うのか」

といった事柄——かつてはそういうことを教える時間がなかったのですが——むしろ大切なのはそういうことですね。講義で先生が、物理的のなんとか、化学的のなんとかといっても、物理的というのは量的変化で、化学的というのは質的变化だということがわからないでしょう。本当に知って欲しいのはそういうことです。それを「基礎・基本の定着」というのです。

そうした課題解決能力や活用力をつけるように教育したはずなのだけれど、マスコミが実は政治的背景もあって、「ゆとり教育」批判を激しくやった。親御さんたちにしても9割方は過去の学校教育に不満をもつ層ですから、教育批判のほうが、新聞もよく売れるわけです。

しかし実態は違います。たとえば「ひとつのことに集中できない」「自分で考えをまとめて人に伝えることができない」「基礎教養ができていない」と、これらが「ゆとり教育」の負の遺産だと言われています。だが、話は逆です。そもそも子どもたちがそうだったから、それに対処するための、所謂「ゆとり教育」だったのです。

「ゆとり世代」には、そういう良さがあるのだから、それをきちんと掴んでやるのが大切です。たとえば私の場合、「自分たちはゆとり世代だから」と書いてきた学生たちにこう言います。「こういうことを書く学生は、10年前にはいなかったよ」と。確かに知識のある、頭でっかちな学生は多かったかも知れない。けれども「ゆとりとは何なのか」「だから自分はどういう気分か」というような、そういう捉えかたをする学生は今まで余りいなかった。これは、まさにあなたたちだからできるのだと、そう伝えるのです。他の先生方にもそのことをお話しますと、その通りだと。「私もそう言ったら、学生たちは非常によこびました」という報告をいただきました。

このように、学生たちが自分のことをどう捉えているかをきちんと見ると、それに対する支援・手当のしかたが自然に出てきます。これがFDです。こういうことに取り組んでゆかなければならないのです。

## ■日本におけるFDの必然性

では、具体的にはどういうことを考えなければならぬか。それについて、5つ項目を立ててみました。

### ① 「研究者中心の大学から、学生中心の大学へ」

このスローガンが提唱されて久しいのですが、私たち

はなかなか研究者中心の思考を抜け出せません。FDの視点から言えば、大学は高等教育機関です。教育が中心なのです。たとえば研究費という費目がありますが、以前文科省に研究費増額要望に直訴した際、「財務省的には、研究費という費目はないのです。教育費なのです。国民の税金なのです。良い教育をしていただくためにそれを、研究費の名目で使っていただいているだけなのです」と言われたことがあります。本来はその通りなのです。

### ② 「マス型からユニバーサル型(50%)へ」の移行

30年以上前の話ですが、NHKが「大学の大衆化」をテーマに連続番組を放映したことがあります。クラーク・カー(Clark Kerr)という高等教育研究第一人者の編集になるものですが、そこで紹介されたカリフォルニア大学バークレー校の授業風景を見て、私たちは驚きました。エジプト学の講義初日。トランペットの吹き鳴らされる音とともに、講堂の扉が開き、クレオパトラを連想させる衣装をまとった女性助教授が輿で担がれて入ってくる。学生たちは立ち上がり、ヒューヒューと歓迎の口笛を鳴らし、喜び合うのでした。

なぜそういうことをするのか。今まで大学は「学問を学びたいから来る」というのが前提だったわけです。だが、大衆化時代の大学というのは「勉強したくなくとも来る」というのが前提なのです。先生方は「最近の学生は、教育に関する動機づけを何も持っていない、何となく来ているだけだ」と仰いますが、大学進学率が3割を超えてしまえばそれも当然です。しかも当時は「マス型」の時代に突入したということが話題になっておりましたけれども、今はそれを超えた大学進学率50%超の「ユニバーサル型」の時代に突入したのです。

こうなると、本当に小中学校と一緒に、学生は学校があるから来るだけとなります。授業のやり方も変わります。たとえば小学校の先生方は、ギリシアの歴史等に興味のない生徒に対しても、色々惹きつけるような工夫をしている。先ほどの「クレオパトラの輿」の例もそれと同じことですよ。それに耐えられる教員と耐えられない教員がいるというのは、また別の話ですが、「ユニバーサル型」になったというのは、そういう意味なのです。

文科省は2000年まで、大学進学率が50%を超えないための政策を取ってきました。しかし、解禁されるとたちまち上昇して、今や50%超に達しております。そう

なれば新しいタイプの学生がたくさん入ってくる。進学率が3割切っていた時代のイメージではもはや語れません。彼等は勉強したくて来ているのではなく、ただ何となく来ている。それをどうやって「学び」へと動機づけてゆくか、そこから始めなければいけなくなったのです。unwilling学生対策が急務となったのです。



### ③ 学生の「学力低下」

この点も今日、嘆かれています、当然ですよ。学生定員が倍になって、児童・生徒数は半分になったのですから。既に学力のない学生が来るのは当たり前なので、どうにか底上げをしないとイケない。本当に厳しい状況です。2000年当時、「全入時代」になれば、20年後に同じ学力を維持するには、定員を半分にしなければならないという試算が出ていました。しかし、実際はその逆で、総定員数はますます増えています。したがって、学力底上げのための授業改善をする他に、手はありません。

### ④能力開発の社会的責任の増大・脱学歴社会の構築

実は、アメリカの教育関係者からは「日本の教育は素晴らしい、excellentだ」と、よく言われます。これも皆さんのイメージと異なっていると思うのですが、PISA（OECD生徒の学習到達度調査：Program for International Student Assessment, PISA）とTIMSS（国際数学・理科教育調査：Trends in International Mathematics and Science Study）と、2つの国際学力調査でともに優秀なのは、日本・韓国・カナダ等と限られた国だけなのです。たとえばフィンランドは生涯学習能力型学力を表すPISA型学力が高いと言われています。だが、基礎修得型学力と言われるTIMSS型は低い。シンガポールやマレーシアとなると、TIMSS型は高いと言いますが、PISA型では話にならない。PISA型とTIMSS型の両方が高いのは日本など、数少ない限られた国だけ。海外の教育研究者からは、なぜ日本人は自

の教育に自信を持たないのかと不思議がられるのです。

ところがその彼らも、こと日本の大学教育だけは真似したくないと言います。ミッキーマウス・サブジェクトばかり集めさせて何とか卒業させる。4年次になると、企業回り等でほとんど授業に出て来ない。いかに4年間のスクーリングをロスさせているかということですね。

CAP制というのも、日本の場合はどちらかといえば、単に授業数が減っただけになっています。だが、「アメリカン・スタイル」。米国の大学の場合、一般に履修の数を制限するだけでなく、各授業で毎回assignment（課題）が出されます。学生は毎回レポートを提出し、真面目な先生は答案以上に長いコメントを記入して返却する、という授業風景なのです。ですから、アメリカの学生は土日ともなると朝から徹夜で論文を作成しています。イギリスから来た留学生が「早くイギリスに帰りたい、こんなことでは殺される」とか言っておりましたけれども、やはり世界のなかではアメリカの高等教育の厳しさというのは凄いのだと思います。それを見ると、うちの大学で「土日は24時間大学を使わせて欲しい」というような要望が学生から出てこないというのは、悪いとは言いませんが、ちょっと考えてしまいますよね。私は学生に、できればアメリカに留学しろと言っていますが。

このような「能力開発」ということを、私たちも本気で考えなければならなくなった。というのは、ひとつには脱学歴主義社会に入ったということがある。それは工業化社会から脱工業化社会（Post-industrial society）に移行したからです。つまり、今までの工業化社会というのは、言われたことをやっておけば良いという社会でした。「同じことを、同じやり方で、みんな一緒に」という行動原理・制度的規範（エートス）に支えられた社会だった。しかしPost-industrial societyになると、行動原理が変わってしまったのです。一人一人がPC端末を持って、主体的に自己判断をする社会となった。

文科省も20年前から自己判断力・決断力ということを主張していますし、企業の側でも、上司が部下にいちいち指示するのではなく、部下が自ら判断してどんどん進め、情報を上げて、上はそれを承認するという、「逆ピラミッド型」の社会組織が求められるようになっている。自分の仕事について3年も経てば、自分で「課長、こうします」と報告し、動ける人間が必要だということです。

たとえば、かつて企業は工学部学生に対して「学生は



製図の線が引けさえすればよい」と嘯いていました。つまり「教育は会社が責任を持つ。学生はどこそこの大学を出たというレッテルさえあればいい。学習潜在能力が見込めればそれでいい」ということです。しかし今や時代が変わって、即座に行動しなければならない。3年しか待ってこないということになりました。大学は、それに応じられる人材の提供を求められるようになってきたのです。こうなると東大・京大だけがエリートではなくなる。國學院にもチャンスが出てきた面はあります。

学生たちの意識も変わっています。昔はミッキーマウス・サブジェクトがたくさんあれば喜んでくれましたけれども、今は「能力開発をどうしてくれるんだ」という雰囲気が強くなっている。大学当局にも学生から、たくさん投書が来ます。たとえば「ある先生は半分しか授業をしない、そんなことでいいのですか」というものだから、その先生を呼んで指導をするというようなこともやっていました。そういう指導システムを含めたFDを、今後検討してゆかなければならないと思います。

#### ⑤ 学問の「分化・多様化」への対応

これも近年言われていることですが、特に福祉など実践分野の「教育の科学化」という課題が生じました。新しい科学の成立は、それらについての教育・指導をどうするかを課題とする。人間開発学部はまさにそういうことを目指しているのであって、教育ということ——どういうふう人間を開発するかを考える課題を持ちます。各種学問の「分化・多様化」に応じて、どうしてゆくか、FDを通して考えなければなりません。

そこでFDということですが、以前は全学的な規模でやっていたのが、今は学部学科で、やはり学問の特性というものがありますから、それに応じて実施する流れになっています。全学のレベルで言えるようなことに留まっているなら、それはFDとしてはもう10年以上前の

レベルなのだということですね。今や具体的に、うちの学部ではこういうことをやろうとか、何ができるかとか、そういうことを検討し合う段階に入っているわけです。

### ■本学部の歩み

そこで、ここからは、本学部のFDの歩みについて、説明をさせていただきます。

#### (I) 学部ブラッシュアップ委員会の実施

この委員会は発足したばかりですが、第三者による外部評価を目的としております。平成21年度第2回の委員会では、外部から天野郁夫先生ほか4名の先生方をお招きいたしました。また、第3回委員会では、まず私から学部の教育方針について報告をさせていただきました。そのあとは、本学部が設置しておりますふたつのセンター(教育実践総合センター・地域ヘルスプロモーションセンター)の長、次いで教務関係で教務委員から、地域との関係ではたまプラーザキャンパスの事務課から報告をしていただいた上で、教育改善の方針や、第2回委員会での外部の先生方からのご意見に対する我々としての意見や回答を述べさせていただきました。

こうした委員会を、今後も、年に3回のペースで続けて行く予定です。今年度も、3月に外部の方を評価のためにお招きするのですが、その前に会合を設けて半年間の反省をするということを考えております。

#### (II) 学部独自の「授業シラバス」の開発

具体的には、シラバスの「到達目標」欄に、本学部の掲げる4つのコア・コンピテンシー「論理的科学的思考能力」「自己表現力」「知識技能の活用力」「課題解決探求能力」それぞれに応じて、授業を通してどのような能力が身につくか、どこをゴールに授業をして行くのかを明確に記載するという事です。また、その際、到達目標や重点目標を観点別に記述するという事も含みます。

ちょうど本学では教務部長を中心に、全学的にシラバスを変えて、到達目標を観点別に記述する取り組みが始まったところでした。本学部でもその一環として、学部独自の観点別評価を取り入れつつ、取り組みを進めることができたので、非常に助かりました。

#### (III) 導入基礎演習・総合講座における取組の充実



教員個別の授業とは別に、全教員が取り組むことを通して、学生を捉えてゆくための共通の土俵を設ける試みです。まず「総合講座」では、「妙高少年自然の家」というところへ、全教員が230名の学生を連れてゆくのですね。「同じ土俵」のなかに入るわけです。そうすると、教授会等でFDの検討をする際、〇〇君、××さんと言えば、少しでも共通理解がはかられ、多少とも分かり合えるという、成果を積み重ねていただいています。

また、「導入基礎演習」では図書館やコンピュータの利用方法を教えますが、更に概括的に國學院大學の歴史についても教えています。校歌の意味についても解説し、併せて校歌の練習も行います。こうした取組は今や、どの大学も当然のこととして行っていますが、本学部の場合、導入基礎演習等で培われた共通の土俵を活かすことで、学生たちが共通して身に付けられるようにしています。

#### (IV) ルーム制における取組の充実

ルーム制というのは、ひとりの先生が12人程度の学生を受け持つ制度です。高校のホームルームのようなものです。たとえば退学等の記録を見ますと、3年生以降で退学になる学生はいない。大体において、1年生から2年生の前期くらいが勝負で、退学する学生はこの間に退学してしまうのです。そこで、この時期、学校に来なくなったときに支える先生が必要なのではないかということで、この制度を設けたわけです。

ところが、先ほど申し上げたブラッシュアップ委員会の席上で天野先生から、最初は導入基礎演習や総合講座があるからルーム制も回るけれども、そのあとこのシステムを維持してゆく基盤がない。それをどうするかというご指摘をいただきました。これを受けて本学部は新たに、「学生活動支援委員会」というのを立ち上げまして、内部規程も作りました。ルーム長を一堂に集めて、色々な活動を、その委員会を中心に進めてゆくということです。こういう風に改善ができてゆくのも、ブラッシュアップ委員会のひとつの良さだと思います。

このように、本学部ではルームを単位としてFDを進めています。すでに退学した学生も出ましたし、他にも問題を抱えた学生は出てきますけれども、そういうときも全部、そのルームの先生がその学生に対応し、相談に

のり、その経過を月2回ある教授会の「FD協議事項」でオープンにするという形式を採っております。

#### (V) 「若木育成会キャンパス見学会」独自型の実施

これについてはむしろ反省すべき点がありまして、保護者にあまり積極的に声をかけなかったため、やや少なめの来場に留まった感があります。1年生200人の学生のうち、40人ほどの保護者—家族でいうと30家族に来てもらいました。見学会は、保護者を株主とした株主総会という捉え方を了承していただき、「学生たちの今と本学部教員の対応の成果」を誇示し、ルーム教員と保護者との交流会（昼食会）で出た意見を集約します。

#### (VI) 学部教授会「FD協議事項」の設定

本学部では学部教授会を月2回組んでいます。その2回目に、審議事項、報告事項の他に、「FD協議事項」として、先生方の忌憚のない意見を述べていただく時間を取っています。決議はしません。協議するなかで、審議・決定しなければならないことが起きましたら、改めて教授会の報告事項もしくは審議事項に上げて、決定することとなっています。FD協議の場面では、教授会において本学部教員は、まさに「先生をしています」。

#### (VII) 「國學院大學人間開発学会」の充実

FDを行う際、先生方にとって特に抵抗があるのが、教育と研究との関係についてなのですね。研究は研究、教育は教育と、どうしても分けて考えてしまうのです。たとえば、法学部は法学の研究、経済学部は経済学の研究ということがまずあって、それとは別に、これらを中心に教育するかという考え方をします。そのためのFDだ、ということになっているわけです。それは辛い。



それはそれで仕方がないのですが、本学部ではそうで

はなく、研究自体が教育の一環である、あるいは、研究を追求することは教育理念の追求でもあるという立場を取っています。人間開発学会というのがなぜFDの取組に挙がっているのか不思議に思われるかも知れませんが、そういう意味でここに掲げさせていただきました。

そこで、人間開発をするというのはどういうことか。私たちの学部では、たとえば「教育の前に人間開発あり」とか、「頑張ることを応援する科学」ですとか、「共育」「誓同」等、色々なスローガンを掲げて進めています。いわゆる「スモール・ブランディング」です。「人間開発」は、これの科学化が待たれるし、また、教育の理念でもある。ここが他学部と異にしているFD上の利点でしょう。

また、人間開発は社会科学としての発展も予期されます。國學院大学は神道の大学ですが、私としては、神道というのは元来地域の民を育てるという理念を持ちますので、地域貢献すなわち「民学連携」の方針をとるべきだと考えています。主に文系の学部ですから産学連携ということは難しいですが、民学に官も含めて、「民学官連携」というあり方をとるべきだと思っております。

なお、本学会の設立記念大会は、本学「教育開発推進機構」と共催というかたちで開催させていただきましたが、そこでは天野郁夫先生に「これからの大学のあり方と課題」という題で御講演をいただきました。



#### (Ⅷ)「授業観察会」の拡大

これは、従来、授業の「観察」は実施している大学があるのですが、一般に授業のあり方の「検討会」までには至っていないということが課題とされています。そこで、これに特に力を入れたいと思っています。たとえば観察会をやったあとに交流会をしまして、飲みながらでも、色々話し合うということをやらなくちゃいけないなと思っているのですが、本格的な実施は今年の課題です。

#### (Ⅸ) 全学FD講演会等への積極的参加

人間開発学部は全学のFD講演会の出席率では常に

トップです。それは、ひとつには、この人間開発学というものがそういう性格を持っているということであって、うちの先生の意識が特に高いとか自慢するわけではありません。FDあってこそその学部だということですね。

#### (X)『人間開発学会FDリブレット』の発刊

昨年度には創刊号として、先ほど申し上げました天野郁夫先生の講演内容を刊行いたしました。今年度も第2号を出す予定でおります。

改めて総括をさせていただきます。私たちが特に力を入れねばならないと考えている項目は、大きく分けると、(1)FDに係わる「学部ブラッシュアップ委員会」の設置、(2)学部FD推進委員会による「学生による授業評価アンケート」の実施、分析と公表、(3)学部FD推進委員会主催による「公開授業観察・検討会」、(4)は「授業改善学生会議」の設置、(5)学部独自の「授業シラバス」の開発、ということになります。(3)と(4)についてはまだ課題・ペンディングの状態ですが、それ以外はほぼ実施できていると言ってよいと思います。これらは文科省に提出した設置認可申請書で、学部の取り組みとして挙げてある項目でもありますから、現在のところ、毎年受ける文科省高等教育局の「アフター・ケア委員会 (AC委員会)」の審査に対しても、まずは胸を張って応じられる状況だろうと考えております。

### ■おわりに —今年度の課題—

最後に、本学部の今年度の課題についてお話をさせていただきます。

#### ①「学生FD」(学生中心の大学に向けて)

まず、先ほど触れました「授業改善学生会議」の設置、すなわち「学生FD」の試みです。これについては、昨年度はまだ1年生ということもあり、手をつけておりませんが、来年度以降には実施したいと考えております。

佐賀大学に在職していた当時から、先生方のFDと、スタッフ・ディベロップメント、そしてもうひとつ、「チューデント・ディベロップメント」の実施ということをご提案しておりました。というのも、先生方、正直言って「学生たちに授業を評価する力が果たしてあるのだろうか、ちょっと怪しいのではないか」と思うときもあるのではないのでしょうか。たとえば、私が一所懸命授業を



やったときに限って、学生の評価があまり良くない。ところが、忙しくて仕方がなく、手を抜いて授業をやらざるを得なかったようなときに「良かった」と評価が出たりするわけです。(笑) こんなことで、彼らは果たして本当にきちんと授業評価できているのか、私の授業がちゃんと伝わっているのか、という思いはあります。



そうすると、やはりスチューデント・ディベロップメントということが必要だろう。彼ら自身をも変えなければいけないのではないかと考えるのです。「学生中心の大学」とは、彼らが我が儘をするという意味ではなく、彼ら自身もまた責任をもった存在であって欲しいということです。そういう存在を育てたいということで、本学部にも「授業改善学生会議」というものを置きたいと思っているのです。

佐賀大学では、『FDブックレット』などを使って、学生たちの授業改善提案を冊子にし、機構長表彰のようなことをしたりもしました。そこにレポートを提出してくれたのは、7000人の全学部学生の中の70人くらい、1%。だが、その1%が重い。先生方の中からも、たった1%じゃないかという声がありましたので、「1%の重み」ということを、私からも書かせてもらいました。

## ②教員同士による「授業観察会」のシステム構築

次に、先ほど申し上げた「授業観察会」についても、もう少しシステム化したいと考えております。今はただ自由観察というかたちですが、本来これはコリーグ（同僚）評価で行うべきことなのですね。

そもそも評価の方針には、まず自分のなかで、「自分探し」をしながらプロフィールしてゆく個人内評価。仲間内で行うコリーグ評価。そして、先生が上から目線で評価してゆく相対評価など、色々な方式があります。

そういう意味で言うと、大学のなかではあくまでもコリーグ評価で行うことが望ましい。そうした意識を踏まえつつ、同僚が同僚をお互い応援しあう、そういう評価

システムをどうやって作るのか。率直に言って、まだそういうシステムはできておりません。ですから、まずは本学部で手をつけておきたいと考えております。

## ③「響育」と「共育」の教育システムの更なる進化

また、ルーム制を中心とした響き合う「響育」と、たまプラザキャンパス内だけではなく、横浜市や神奈川県といった地域社会と共に育ってゆく、育ててもらおうという意味での「共育」と、これらの教育方針をバックアップしてゆくために、本学部には「教育実践総合センター」と「地域ヘルスプロモーションセンター」を設置してあります。学生教育の側面でも、それをいかに活用してゆくかが今後の課題です。現在は、教育実践総合センターでは、教育ボランティア、教育インターンシップ、未来塾などで、また、地域ヘルスプロモーションセンターでは、年に数回実施する地域貢献事業への協力などでそれぞれ学生指導の接点が生まれています。

## ④学部ブラッシュアップ委員会の意見の検討とその具体化

最後に、「第三者による外部評価」を今後も進めてゆきたいと思います。「外部評価」という言い方にはやや問題もあります。たとえば、大学によっては、他学部の先生がやっても「外部評価」だと言っているところもあるのです。そこで私たちとしては、ここであえて「第三者」という言葉を使いました。つまり、全くの部外者の方から見て、本学部はどうか、ということについて意見をいただきまして、それをいかに具体化してゆくか、実現してゆくかを、考えてゆきたいということです。

ということで、今年度の課題としては、以上の①～④が挙げられるかと考えております。ご静聴、どうもありがとうございました（拍手）。



# 第Ⅲ期SA座談会

## ～学生視点で大学授業を考える～

機構において、授業補助のための学生スタッフであるSA（ステューデント・アシスタント）制度の検討をはじめ1年以上が経過し、また、制度の本格的な導入のためのトライアルは第Ⅲ期目を迎えました。

第Ⅰ期では10名不足だったスタッフも、第Ⅱ期から公募制を導入したことによって、30名ほどとなり、また、これまでトライアルにご協力いただいた先生方からもご意見を頂いて、就業形態や業務内容などの改定を進め、予定していた平成23年度からの本格導入もより現実のものとなりました。

そうした中、機構では、SA制度の情報発信、とくにSAにはどのような学生が登録し、その任にあっているか、ということを広く学内外に紹介するため、SAに本ニュースレターの一部の企画を任せました。

本企画は、SA同士が声を掛けあって有志を募り、「何をするか？」という白紙の状態から考え、企画・運営し、編集作業までを行ったものです。



### 日時

平成22年11月18日(木) 14:30～15:30

### 会場

國學院大學渋谷キャンパス 3号館3階

教育開発推進機構 学修支援センター相談室

参加者：(五十音順、敬称略、所属等は開催当時)

**市野菜歩** (神道文化学部神道文化学科2年・記録)

**神崎 碧** (文学部日本文学科3年)

**小坂 聡** (文学部史学科4年)

**杉山美幸** (文学部日本文学科3年・司会)

**中山慧里香** (文学部日本文学科3年)

**永田 絢子** (法学部法律学科3年・司会)

**本城由季** (神道文化学部神道文化学科4年)

### はじめに

#### 【企画の趣旨】

本居宣長の『うひ山ぶみ』に、このような一節があります。「又さやうにとり分てそれと思ひよれるすぢもなく、まなびやうも、みづから思ひとれるかたなきは、物しり人につきて、いづれのすぢに入てかよからん、又うひ学ビの輩のまなびやうは、いづれの書よりまづ見るべきぞなど、問ヒ求むる」。ここで宣長は、「まなびのすぢ」が定まらぬ初学者にとって重要なのは、良い先生に師事し、一から諸事を教わることだと述べています。これを大学に置き換えると、重要なのは、先生との関係において、学生が「どのように教わることができるか」ということになります。今回、我々が本座談会を企画したのも、そういった関係について、改めて考えてみる必要があるのではないかと思いついたからです。つまり、先生方の創意工夫を、学生へ還元するための「講義の場」において、学生の感じる「良い」講義とはどういうものなのか、といったことを改めて考えてみると同時に、先生方へ学生の「生の声」をお届けできればと考えた次第です。

**永田** これから座談会を始めます。早速ですが、まず端的に、皆さんの思い浮かべる「良い講義・良い授業」についてのイメージをお聞かせ下さい。そのあとそれに基づいて、今回の座談会の趣旨に沿って話を進めていきたいと思えます。では、小坂さんからよろしいですか。

**小坂** 僕は教職を目指しているので、そういった点から考えさせてもらおうと、学生に全部教えるのではなく、ヒントのようなお題を出して、学生が「面白そうだな、調べてみようかな」と思うような、知的好奇心をくすぐる授業が良い授業だと思います。

**本城** 小坂くんと同様、知的好奇心という点で賛成なのですが、もう少し具体的に言うと、「知らなかった新しいこと・新しい考えを学習できる授業」が良い授業だと思います。

**神崎** 参加型の授業。先生の講義だけで終わるのではなく、学生にも作業をさせながら説明をする。自分も実感が湧いたり、自分もそれならできるという風に思わせて、「実際に体験して行動できるようにさせる授業」が良いと思います。

**杉山** 意味深になってしまいますが、「寝ない授業」、これが良い授業だと思います。

**中山** あまり親切に説明されすぎても飽きてきてしまうので、授業の展開で、「最初は学生がついてこられるように授業を進めて、最後は先生を自分から追いかけてほしいと思わせる授業」が良い授



永田絢子さん



本城由季さん

業だと思えます。

**永田** ありがとうございます。私も小坂さんや本城さんと同じく、知的好奇心をくすぐる授業が良い授業だと思います。「興味はないけど、ちょっと聞いてみようかな」と思った学生でも引き込まれるだろうし、おもしろそうだと学生が思うかもしれない。専門科目だとしても、さらに広げられるんじゃないかなと思えます。さて、これらを聞

いたうえで何か思うことがありますか？ いかがです、小坂さん？

**小坂** ハードルが(笑)。そうですね、杉山さんが言った「寝ない授業」について、常に学生が授業を聞いていなきゃいけないというのは、少しつらくはないですか？ 集中するにも限界があると思うんです。先生が学生に考えさせて、何か一つ持ち帰れるものが明確になっているといいのではないのでしょうか。例えば、わからなかったことが「つながった、わかったぞ!」となると、授業がどんどん楽しくなると思えます。「学べば学ぶほど、自分が何も知らなかった事に気づく、気づけば気づくほどまた学びたくなる」という言葉もあるしね。

**中山** 先生は知識を持っているから、あえてそれを見せびらかしつつやる。あの先生は、私の知らないことを絶対知っているみたいな。

**神崎** 授業で発表をする時に、学生が一から説明しても先生はその内容についてすでに知っているんだよね。だから学生からすると、発表をどういう風に工夫するかは、自信が無くても自分で考える。この「考え、工夫すること」が、大学らしさだと思います。

**本城** ただ、考えるためには基礎となる知識が必要で、知識がないと考えることができない。全く基礎となる知識がない状態で、専門的な話をされてもついていけないし、やる気がなくなる。そういうことがあるので、参加している学生がどの程度の知識を持っているかを分かったうえで、課題を提示できる先生だと、授業を受ける側としては有り難いのかな。

**杉山** 参考文献を提示するかしないか、質問を募集するかしないか、研究室へ招いてくれるかしてくれないか、実際に学生がそれを活かすかどうかはわからないけど、そういう雰囲気というか、スタンスを見せてくれるだけでも全然違うと思う。

## 初回に魅せる

**杉山** 例えば3、4年生だと先生方がどんな授業をするか知る手段を独自に持っているとは思いますが、それでも毎回の授業選びには何を基準にしますか、内容ですか？

**本城** 例えば、シラバスだったり。

**神崎** 一回目の授業の先生の印象だったり、授業の進行に関するレジュメを作ってくれる先生だったりすると、先生の人柄がわかると思うので、そこが基準になると思えます。

**永田** 結局、先生の人柄判断になりがちなのかな。たとえ、どんなにすごく授業の内容やテーマに興味があったとしても、授業に出てみて、一番最初の授業でちょっと先生が神経質になっている授業だと、いいやと思ってやめるとか。ならこっちの先生の方がいいやとか、同じ時間でも友達が良かったよって言っていた先生の授業を履修するとか。学問への興味より、先行して選ぶ基準に

なっているのは、先生の一回目の授業の姿になっていると思うんです。

**本城** いくらシラバスに興味のあるテーマで書かれていても、授業を受けてみて、それを理解できないと意味がないんです。先生が理解できるように話をしてくれるかは、一回目の授業に出てみないと分からないんですよ。

**杉山** 授業の第一印象は、その授業を取るか取らないかの重要な判断材料ですね。学生側からの授業セクション。

**小坂** まるで「授業仕分け。」

**神崎** はい(笑)。でも、第一印象が悪くなくても授業が始まると、すごく面白い話が聞ける授業っていうのもありますよね。

**市野** 私もそれが理由で一旦やめようと思ったんですが、実際履修してみたら、とても勉強になる授業をされる先生でして、半期の内に何度も「受けておいて良かった」と思ったことがあります。

**永田** それって逆に言うと、やめちゃった授業が実は面白かった、自分には必要だったかも知れない授業だった場合があるってことだよな。

**中山** それだとしたらもったいない。

**小坂** 得られたであろうものを失うことだからね。

**本城** だとしたら、初回で先生には、この授業が面白いってことを積極的にアピールして欲しい。

**永田** 大学の教壇に立つほどの人達なんだから、きっと学生時代からその分野が好きで、ずっと追いかけてきたんだから、「私の専門はこれだ!」ってアピールしてくれる先生も話を聞いておもしろい。

**小坂** 史学科の授業で非常勤の先生が、学界の愚痴をよく喋って



杉山美幸さん

た。でもそれは熱意があって、「学界が現状のままだと中高生の日本史離れは止まらない。だから僕は云々」って言って、そのために工夫した授業をしてくれた。本もいくつか書いてるんだけど、同じトーンで書いてある。そういう本は読んで面白いいし、そういう授業だったから受けても面白かった。

**本城** その授業が面白いことや重要だっということがしっかり学生に伝われば、

みんな取ろうと思うんだろうな。

**杉山** そういう先生の授業は、学生に知識がなくても何か伝わるものがあるはず。それが勉強のきっかけになったら、こんなにいいことはないですよ。

## 引かずに惹く

**永田** 眠くない授業って話があったと思うんですけど、どんなにやる気があっても、睡魔を抑えられないときってありますよね。だから、寝ないというよりは、授業中に「内職」をしない授業がいいんじゃないかな。真面目に授業を受けている人と同じように席に着いて、最後まできちんと出席しているのに、どうしてその先生の話を選ばずに、関係のないことをするのか。

**杉山** 授業放棄と一緒にだよな。

**永田** 寝ない授業というより、常に惹きつける授業じゃないですか。半期・通年ずっと授業と関係のないものを持ってこない授業、それこそが面白い授業じゃないかな、きっと双方にとってもいい授

業だと思う。多分、先生の中にも注意したい先生がいると思うけど、その中でも言えない先生のほうが多いんじゃないかな。中には、授業と関係ない参考書見ながらノートもとってる子もいるけど。授業とは関係のない作業に走るなどいえる立場ではないけど、どうしてそうなるのかは考える余地があると思うんです。

**神崎** じゃあ、前の話と関係して、例えば今の永田さんの話に、人数は関係あると思います？先生が回らなくても、少人数クラスだと集中して近くで聞けるけど、大人数は……。少人数クラスにしていこうとする動きは大学でもあるのかな？

**中山** 教室変更の多さから推して知るべし、じゃない？今でも学生が溢れている授業があるんだし。

**杉山** 少人数と大人数の違いって？先生との距離なのかな。

**永田** 大きな教室でも、後ろまでトコトコ歩いてくる先生とか、いきなり質問を振る先生だとか、マイクを回す先生とかいるよね、一人二人じゃないはずだけど。そういう時だけは参考書も閉じるだろうし、「やばい！先生が来た」ってなってレジユメを上にかぶせたりすると思う。やっちゃいけないということはわかっているんだと思うんです。



市野菜歩さん

**神崎** たしかに今までSAをやって、学生にプリントを配っても受け取ってもらえなくて、後ろで遊んでいるだけだなんて感じる経験はあった。

**杉山** 必要ないと思っているんだろうね。

**本城** でも、後ろの方で、授業とは関係のない作業をしている人がたくさんいる授業っていうのは悪い授業なのかな？何かしら魅力があるとは思っただけど。

**神崎** 授業を受けてると、後ろの方がうるさくて集中できないから注意してほしいと思う時があるよね。それって、悪い授業になっていると思う。

**永田** 注意をしない先生って多いよね。

**中山** 注意をしない先生は、してもあまり効果がないって思っているのかな。

**永田** 「最初にあれ禁止これ禁止って言って、違反したら学生証見せろ」ということも、最終手段としていい。

**杉山** 緊張感を持てる授業が良いよ。

**永田** 飲食禁止、ガム禁止、携帯鳴ったら減点って、最初は厳しい先生になって思ったけど、教室内の秩序がすごい保たれている、それが嫌な子は来ないし。

**中山** その方が問題が起こってからよりは、いいのかな。

**永田** 私は最初にこうしますって提示する先生は、多少厳しくても、学びたいと思う人は来ると思うし、逆にそういう人しか来ないから、先生的にもいいんじゃないかな。

**神崎** でも、先生も気にしながら言っているよね。厳しすぎるけど、最初にいっておこうって思うんだろうね。

**永田** すごく神経質な先生は嫌だし、そういう授業はとらないけど、ある程度のことだったら、それは当然だよなって思える。

**杉山** 私が受講してる授業では、後ろの方で携帯いじったり、話をしたりでうるさくなったりする学生はいる。その時、先生は「ちょっと静かにしてくれる」とか、「携帯使っているよね」ってピンポイントで注意します。それは、全体に言うより効果があるからなのかな。

**市野** 必修の授業で、200~300人単位の授業だったんですけど、後ろがどうしてもうるさくなっちゃって、注意してもやめない。先生が教科書持ってない学生に、自分の教科書とマイクを渡して読ませたら、次からは誰もしゃべらなくなったっていうことはあります。吊るし上げみたいにはなっただけど、先生の話の聞かないから読めないっていうのもあったんですね。実際、大教室で遅れて、しかたなく後ろの方に座ると、先生がマイクを使っても、細かいところは聞こえないし、黒板も見えづらいので授業に集中できないっていうのはあると思います。

**本城** そもそも後ろになっちゃって集中しづらい環境にはなっちゃうよね。

**杉山** 環境の問題？

**本城** 横長の教室の端っことかそうだよ、黒板も見えなくて。

**永田** 黒板を映すような機材があればいいよね。でも、実際聞ける先生も、見える先生もいるし。そんなに大人数じゃなくて、しかたなく大教室を使うようになった先生の中には、わざと黒板に小さく書く先生もいた。

**神崎** 前に座らせるため？

**永田** うん。もう少し大きくしてくださいって言う学生や、前に座っても見えないってこともあるけど……。ある種の手段かもしれないけど、やりすぎかなって思う場合もあるかも……。

**杉山** 厳しさはある程度必要だけど、やりすぎはね。

**神崎** でも、極端だよ、無意識に小さく書いてしまう先生もいるし、後ろからじゃ全く見えない薄さの先生もいるし……。先生も、夢中になって授業をしているから、自分自身そのことに気づかないんだよ。

**杉山** 話し方が上手くない先生でも、実は聞いてたらおもしろいことを言ってるんだって知って、聞くようになったりもした。

**本城** 一生懸命聞けば分かるっていう授業は、寝ることがあったとしても授業と関係のない作業はしない。

## 大学の「先生」

**市野** 童話の授業だったんですけど、それが専門の神道で役に立ってるというのもあるんです。去年の授業が今になって役に立ってた。授業自体はつまらなくても、そういえば去年やったことがあるかもしれないなって起きていられるし、聞こうとも思えます。

**中山** 知ってる知識が授業ででると興味がわきますよね。聞いたことのある単語が出たりすると、そこだけ、「なんだろう今の？」って。今思うと伏線だったのかも。

**小坂** ま、種を蒔く、的な。

**杉山** 学んだことが他の授業に活かせるっていうことは大切だし、必要でもありますよね。



中山慧里香さん

**永田** 「興味ないし、関係ない」って思ってる授業でも、話は聞くこともある。基礎演習の前で絶対学校にいないといけないから、どうせならとっておこうかなって、大人数で受けてたんだけどね。例えば授業で、かの有名な何とか先生や、その分野の先生の名前をだして、先生がずっとしゃべってる授業なんだけど。先生がその学問のこと、



神崎 碧さん

すごく好きなんだなって伝わってきて、先生かわいいなって思ってね。最後まで授業も聞いて、プリントにメモもしたけど、結局、先生が好きだから受けてた感じだった。3年の専門の授業になってから、何とか先生がいて…って話になったときに、聞いたことがあるってなって思い出すんです。

**本城** まさにさっきの小坂君の種を蒔く云々で、後々効いてくるってあるよね。

**永田** 即効性なくても、徐々にね。

**中山** そういふのを考えると、聞いてない子は、こういう経験もなくて、近くしか見えてないんだらうなっていうのはありますね。

**永田** リアルタイムの講義だからこそ、先生が話す授業内容も変わってくると思うんです。「あ、思い出した」とかで今までと違う話をするかもしれないし、そんな先生に会えたら、来年も関係ある授業をとって、本を読もうとも思う。

**杉山** そうだね。あと中山さんも言ってたけど、学生の中には先生の話の聞いている人と聞いてない人がいる。聞いてない人でも聞きたいと思わせて惹きつけることができるっていうのがいい先生だと思う。

**神崎** 自分は日文だけど、史学の授業を受けたとき、先生が「他の学部や学年の子もいるよね?」「高校でやった?」って聞いたりして、分野が違ったりしても、やっぱり面白い授業だなと思ったし、最後まで授業は受けましたよ。月曜1限でも面白かった。先生が、学生がわかっているかどうかを調べながらやってたし、しかも、簡単というレベルまで落としてないと思うんです。レベルはこころ変えてると思うけど、そこは先生の工夫だったのかなって。

**永田** 哲学科の授業をとったんですけど、哲学の子が多くて、本格的にやるのかな、どうしようと思ってたんです。でも授業中に、「世界史や倫理をやったことがある人」とか「分かるかな?」と前に座る子に聞いたり、「他の学部の子はいるか」と手を挙げさせたり、「これはここにあるよ」とか。補足レジュメを初回に渡して、毎回の授業で持っているか確認するんです、授業の頭とかで。あれは受けてて楽しかった。

**中山** 授業に対して、熱意のある先生だったんだ?

**永田** うん、先生自身が楽しそうでね。あまり興味を持ってない人もフォローしてくれる先生だったよ。

**杉山** そういう先生だと、もっと学びたいと思うし、興味を持っていなかった学生も質問しに行きたいって思える。

**神崎** 勉強をしたい、話を聞きたいって言う子はおいでっていうスタンスの先生はうれしい。

**本城** オフィスアワーとか、メールでそういう時間を取るの、もっと深く知りたいということに対して、フォロー・ケアという意味で使われていると思いますね。こういうのは、良い授業の要素だと思います。

**神崎** でも研究室の怖さが……

**市野** どう入ればいいのかわからないっていうのはあります。

**小坂** でも利用してみると意外な発見があるかもしれないよ?

**市野** 意外な発見ですか?

**小坂** うん、すごいオーラが出てて、近づきたいなって1年生のとき思った先生がいるんだけど、学年が上がるにつれて先生の意外な一面を見て、この先生は実は良い先生なんじゃないか

なって。先生が辛く当たったりするのは、目的があってわざとやってるんじゃないかなとは思う。学生は辛くて大変だけど、あの時ああいうことがあったから、今、卒業を前にして、いい感じになってるんだと思う。

**神崎** たとえ、怖かったとしても、課題が重くても、嫌な印象があっても……先生の話の聞いて良かった、この大学に入って良かったと思える先生が良い授業してるんだと思う。まだ私たちが、卒業とか、「最後」に辿り着いてないだけだと思う。

**永田** 國學院って、すごく厳しいけど意外と親身な先生が多いよ。

**杉山** なるべく早くに、学生がそこをどう気付くか、ですよ。

**中山** きっと、勉強もしてるし、その分野が好きにもなってると思いますね。

**永田** 本屋でその分野の本をチラッと見た時、そういえば、先生が言ってたやつかもって思って、ずっと残るだろうと思う。そういうのがいい授業だと思う。ついつい寝かけちゃうこともあるけど。

**神崎** 曜日とか、天気とかも影響してくるよね。

**小坂** 薄れゆく意識の中、心の中は先生へのお詫びの言葉でいっぱいなんだけど。

**杉山** ただし届いてはいない(一同笑)。

小坂 聡さん



## おわりに

**永田** こう考えていくと、良い授業って、内職みたいに関係のないことをしない授業で……。

**杉山** より深く知りたい人はもちろん、あまり興味のない人もフォローしてくれる。

**中山** 要は情熱のある先生。

**永田** これが、良い授業の基礎であって、要素だとも思う。

**神崎** でも、その中にルールを守れない人がいると、残念な授業になるんだと思う。

**杉山** 良い授業のはずなのに、学生側の問題でっていうのが多いよね。そうなっちゃうから、先生からしたら「授業改善なんて学生が先だろ」という意識が生まれちゃうのも無理ないと思う。むしろ当然だよ。

**本城** だからこそ私たち学生がどこまで先生の努力に応えられるか、その姿勢を示すことができるかが、おそらく重要なカギなのかな。

**永田** 興味がある人もそうでない人にもフォローが出来る授業で、先生が学問的な情熱を持ってる授業なら、聞きたいと思うし、聞こうかな、という気にもなる。

**小坂** すると、花が咲く、的。

**本城** 種を蒔く云々は小坂君の伏線だったのか。

【統括】 守屋翔太 (文学部史学科4年)

【企画・運営】 本城・小坂・神崎・杉山・永田・中山・市野 (所属等は16P参照)

【編集】 田邊早和子 (文学部日本文学科3年)

吉川香織 (文学部日本文学科3年)

吉田有希 (経済学部経済ネットワーク学科3年)

シリーズ

# 大学授業最前線

—教員の努力！ 学生のまなざし！（3）—

本コーナーでは、教員の努力と学生の意欲によって作られた、國學院大學で行われている素晴らしい授業を紹介します。シリーズ3回目となる今回は、本学神道文化学部准教授の黒崎浩行先生に、担当される「神社ネットワーク論」の授業運営の工夫について紹介していただいたうえで、この授業から何を学ぶことが出来たのか、受講学生にコメントしてもらいました。

## 教員の授業努力



「神社ネットワーク論」

黒崎浩行

（神道文化学部准教授）

### ●授業に対する考え

「神社ネットワーク論」という科目は、平成14年度に神道文化学部が設置されたときに新しく開講した科目で、2年次科目なので実際にスタートしたのは平成15年度になります。科目名称だけではどんな科目か想像がつきがたいと思いますので、その内容を若干説明しておきます。

昭和20年、GHQの占領政策により国家神道が解体されると、これからの神社・神職は民間の宗教団体・宗教者として他の宗教と同様に、教化活動の主体にならなければならないという要請が生まれました。また、昭和30年代からの高度経済成長を契機とする日本社会の構造変化のなかで、神社が根ざしてきた社会的基盤が大きく変化したため、神社はその対応を迫られることにもなりました。こうした背景のなかで神道教化あるいは神社振興対策は従来から神職養成のなかで重視されており、3年次に「神道教化概論」という科目が置かれています。しかしさらに近年では、神社で継承されてきた伝統文化、まちづくりや地域共同体の再生、環境問題などにおいて神社の価値を社会が再認識する流れがあり、社会の諸アクター（行政、教育、商工業界、福祉、環境NPOなど）との連携（ネットワーク）

もより重要になってきています。「神社ネットワーク論」では、こうした現代の神社をめぐる社会的状況を客観的に把握、理解しつつ、これからの神社、神職にできることは何かを探っていくことを目標にしています。

そこで、受講する学生が現代社会における神社のあり方に主体的な関心をもって授業に臨むことを促すための工夫を、初年度から重ねてきました。

### ●授業運営上の工夫

一人一人の学生が授業内容を理解するだけでなく、理解したことをベースにして具体的な問題について学生どうしが話しあえる場を作りたいと考え、グループ・ディスカッションの時間を数回（前期2回、後期2回）設けています。学生はディスカッションの前の週までに授業への質問や他の学生に聞きたいことなどを小レポートにまとめて提出し、これにもとづいてできるだけ同じような関心をもった学生のグループになるよう私がアレンジします。当日各グループで司会役と書記役を決めてもらい、小レポートに書いた内容を相互に確認しつつ、約1時間のディスカッションを行ったのちに話しあった内容を発表してもらいます。書記がまとめた議事録は翌週にコピーして配布します。

初年度からこの方式を続けてきましたが、3年目ごろから後期のグループ・ディスカッションについては少し変化を加えています。後期の1度目は「ロールプレイング」方式、つまりある問題について複数の異なる立場の人物を想定して、メンバーがそれぞれになりきって意見を主張する、というやり方にしました。後期の2度目、授業の最終日は総括として、複数グループに分かれて、1年間の授業で扱った「問い」や「キーワード」を付箋に書き出し、それを模造紙に配置しながら、各自が期末レポートに書くテーマの位置づけを確認するという作業を行うことにあてました。



期末レポートでは受講生各自が「神社のネットワークづく



り」に関して自分の関心のあるテーマを掲げて調べ、報告することとしています。その中間発表を後期授業のなかでもしてもらうようにしています。これは、神社での実習や自分の育ってきた環境のなかでの経験から、この授業のテーマにかかわる貴重な事例や問題意識を示すことのできる学生がかなりいるため、こうしたものをレポートにまとめるだけでなく教室で他の学生とも共有してほしいという趣旨です。これは義務とはしていませんが、かなりの割合の学生が意欲的に取り組んでいます。

#### ●学生に期待すること

科目開講以来、授業づくりは私自身にとってもチャレンジでしたが、おそらく学生のみなさんにとってもそうではないかと思えます。この授業に限らず、積極的に自分の主体的な関心を広げ、先生や他の学生にぶつけてほしいと思えます。

## 受講学生からのコメント

### ①Cさん（神道文化学部・男性）

大学の授業というと、先生の話をつただ座って聞くだけというイメージがあると思います。しかし、黒崎先生の授業はそうではなく、学生が積極的に授業に参加でき、主体的に課題に取り組むことができる授業です。

この授業で取り上げられたテーマは「神社のネットワークづくり」というものです。これは、神社をめぐる人々との関係を新しく作ったり既存の組織を活性化したりすることによって、神社の振興や社会の中における様々な問題の解決をはかるというものです。現代の日本社会は、産業化・都市化・グローバル化などの進行で、人口の変動や地域コミュニティの変化など困難な社会問題がたくさん生じています。神社神道もこれらの影響を受け、人々の氏子意識の低下や祭りの継承の危機などが起こり、神職が活動するにあたって支障が出ています。

私は、黒崎先生の授業で、このような状況の中でどのように私達は教化に取り組むのかということについて深く考えることができました。黒崎先生は問題の所在や今までに神社神道が取った対応を、教科書やプリントの他にご自身で撮影された映像も交えて分かりやすく講義して下さったので、自分の理解が進み、問題について考え易くなりました。加えて授業の中では、あるテーマについて7~8人のグループに分かれてディスカッションする機会が何度もあり、他学生と話し合うことで自分の思いつかなかった視点からの意見を聴くことができました。知らなかったこともたくさん分かり、自分の考えがより深まりました。また、最終授業では、グループに分かれて今まで授業で出たキーワードや問題を付箋に書き出し、それを模造紙に貼りながら授業のまとめをしました。これはブレインストーミングのような感じで、頭の中がとても整理されてとても良かったです。

ところで、この授業は期末レポートで成績が決まり



ますが、レポートの内容は「神社のネットワークづくり」に関連するテーマや事例を各自で設定し、調査報告するというものです。つまり、学生は自分の興味のある視点から問題の考察をすることができるので、課題に主体的に取り組めます。テーマ設定は、祭りや伝統芸能の継承・過疎地域での教化の問題・環境や福祉と神社との関わりなど多岐にわたりますが、中には食と神道・パワースポット・海外での活動など個性的なテーマもあり、バリエーションに富んでとても面白いです。また、フィールドワークで調査する場合もあり、とても良い経験ができます。

この授業を通して考えたことは、自分が将来神職になった時の糧になると思います。社会全体を含めて神道を考察することで、問題が神道史学や宗教社会学、宗教学の範囲にも波及するため、考察するのがとても面白く非常に勉強になる授業です。



## ②Dさん（神道文化学部、女性）

私が黒崎先生の講義の内容や良さをお伝えできるか不安ですが、自分なりに感想を述べたいと思います。

先生の講義の最大のポイントは、受身で受講するだけでなく、自分から発信していく点にあると思います。

例えば、黒崎先生が、神道教化の歴史や神社をめぐる社会の変化など講義をして下さり、その中で、受講生一人一人が関心を持った項目や質問を小レポートとして先生に提出します。

そのうえで、先生が全員の小レポートの内容をもとにグループ分けをして下さいますので、同じ関心を持ったグループ内でディスカッションを行い、最後に、グループの代表者がまとめた意見を発表します。

最初は意見がでないのではないかと不安でしたが、同じ関心を持っているので次々と意見が出て、個人個人の考えがグループで話し合うことにより、膨らんでいくのを感じました。発表の時間は他の関心を持ったグループの意見（考え）を聞けるので、「こういう考えもあるのだ、視点を変えてみよう」等など、学習意欲が湧いて来ます。

また、後期になると、一つの神社の祭礼を取り上げ、その祭礼が抱えている問題について、グループ内で実際に祭礼に関わっている人々（神職、氏子総代、地元紙記者、地元観光業者など）の配役を決めます。

自分の意見だけでなく、役柄の立場になって祭礼が抱えている問題を地域の活性化や神社の立場を踏まえて考え、意見を出し合っていきます。

このように色々な立場になって考えることにより、

自分が神職になった場合、広い視野にたって物事を考え、神社や地域の調和を持てるようになるのではないかと思います。

忘れてはならないのは、意見が多く出るということです。クラスの仲間の意欲や学ぶ姿勢があることと、先生があらかじめ教材を用意して下さり、講義を行って下さるからだと思います。

講義内容に関しては大まかですが、先に述べた、神道教化の歴史や神社をめぐる社会の変化（都市化・日本人の宗教意識・情報化・グローバル化）、祭りの継承と保存、鎮守の森と環境、福祉への取り組みなど様々です。

神社（神道）が抱えている問題と、都市化や情報化のように、現代社会が抱えている問題と繋がっている（ネットワーク）ことが理解出来ます。

最後に、講義を受講する前は、神社（神道）は日本人に根付いていないのではないかと不安でしたが、どのようにすれば日本人の心の中に大きく位置づけられるのか？ と雲を掴むような気持ちでした。受講後、黒崎先生やクラスの仲間のお陰で多くの道標を与えていただきました。また、ディスカッションのお陰で、積極的に自分の考えを言えるようになりましたし、相手の考えや、立場を柔軟に受け止めるようになったことも、大きな成果だと思います。

これから、神社（神道）と日本人や世界のネットワークづくりに精進して参りたいと思います。

# 教育開発推進機構彙報

(平成22年6月1日～平成23年1月31日)

## 会議

### ○運営委員会

第1回：7月21日 第2回：9月23日 第3回：1月26日

### ○國學院大學FD推進委員会

第3回：10月20日 第4回：12月15日 第5回：1月21日

### ○教育開発センター委員会

第3回：6月23日 第4回：7月20日 第5回：9月22日

第6回：10月20日 第7回：1月21日

### ○共通教育センター委員会

第3回：6月23日 第4回：7月20日 第5回：9月22日

第6回：10月20日 第7回：11月24日 第8回：1月19日

### ○学修支援センター委員会

第3回：6月23日 第4回：7月14日 第5回：10月6日 第

6回：11月10日 第7回：12月8日

第8回：1月19日

## 行事

### ○講演会・シンポジウム

[平成22年]

**7月14日** 平成22年度前期FD講演会「『縁』コミュニティによる離脱者ゼロ計画—ICTを利用した学生支援システムの現状と課題—」

講師：原清治(佛教大学教育学部教授・GP推進室長)

主催：國學院大學FD推進委員会・教育開発センター

### ○教育開発懇話会(教育開発センター主催)

**6月9日** 第4回「授業をどうする～歩み始めた人間開発学部FDの現状と課題～」

発表者：新富康央(人間開発学部長)

**11月24日** 第5回「駒澤大学建学の理念成立背景と展望」

発表者：池田魯參(駒澤大学仏教学部教授・曹洞宗総合研究センター所長)

### ○研修会・打ち合わせ会等

**6月5日** SA(スチューデント・アシスタント)トライアル(第Ⅱ期)中間報告会

**7月30日** SA(スチューデント・アシスタント)トライアル(第Ⅱ期)報告会

**10月2日** SA(スチューデント・アシスタント)トライアル(第Ⅲ期)研修会

**11月20日** SA(スチューデント・アシスタント)トライアル(第Ⅲ期)報告会

## FD活動、教育支援

**6月28日～7月17日** 学生による授業評価アンケート(前期)

**7月30日** 新任教職員研修(第2回)

**10月～2月** SA(スチューデント・アシスタント)制度トライアル(第Ⅲ期)実施

**12月3日～1月20日** 学生による授業評価アンケート(後期)

## 出張等

**6月14日** 鈴木助教、地域科学研究会高等教育セミナー「活力ある学習支援センターの組織と運営」に参加

**6月22日** 赤井機構長・中山准教授・新井助教・小濱助教・川島書記・内藤書記、私立大学社会的責任研究会(USR)セミナー「未来に社会的責任を果たせる大学の在り方を考える」に参加

**7月3日** 中山准教授、全国私立大学FD連携フォーラム実践的FDプログラムワークショップに参加(立命館大学衣笠キャンパス)

**8月30日～31日** 鈴木助教、日本リメディアル教育学会第6回全国大会に参加(湘南工科大学)

**9月20日～21日** 中山准教授・小濱助教、全国私立大学FD連携フォーラム実践的FDプログラムワークショップに参加(立命館大学衣笠キャンパス)

**10月14日** 柴崎学修支援センター長・鈴木助教、学修支援活動に関するヒアリング調査実施(日本工業大学学修支援センター)

**11月16～17日** 鈴木助教・中條主幹、東京地区メンタルヘルス研究協議会に参加(東京国際交流館 プラザ平成)

**12月13日** 鈴木助教、学生支援シンポジウム「ピア・サポートのダイナミズムとインパクト～学生が創造するキャンパス空間～」に参加(東京国際交流館 プラザ平成)

**1月28日** 佐川准教授・鈴木助教・内藤書記、文部科学省障害学生受入促進研究委託事業—高大連携シンポジウム—に参加(国立オリンピック記念青少年総合センター)

**1月29日** 中山准教授、全国私立大学FD連携フォーラム実践的FDプログラムワークショップに参加(立命館大学草津キャンパス)

## 刊行物

**5月31日** 学修支援センター相談室パンフレット発行

**7月12日** 教育開発推進機構NEWSLETTER『教育開発ニュース』第2号発行

# 教育開発推進機構 新任教員紹介

教育開発推進機構に、平成22年10月1日付けであらたに3名の教員が着任しましたのでご紹介します。このうち、佐川繭子准教授は学修支援センターにおいて学生に対する学修支援業務に取り組みます。また、阿部弘生、伊藤英之両助手は、本務の人間開発学部助手としての職務の傍ら、本機構において体育を中心とした共通教育に関する研究業務を行います。フレッシュな人材3名を迎え、教育開発推進機構では、今後とも全学的な教育改善と、各学部の教育力向上に対する支援を行ってゆきたいと思えます。

## 阿部 弘生（兼担助手）

**メッセージ** 人間開発学部の助手もしております。5歳の頃に剣道を始め、今では居合、杖道等にも手を出していますが、そこで得た多くの出会いが、今の自分を支えてくれているように思います。すべての出会いを宝として、一生の財産にしていけるよう、皆さんと大いに希望を語り合っていきたいと思っています。よろしく願い致します。



## 佐川 繭子（准教授）

特別  
専任

**メッセージ** このたび、渋谷の岡にやってきました。今までの教員経験を生かし、かつ倦まず弛まず努力を重ね、学生の皆さんがよりよい大学生活を送れるように微力ながら支援いたします。どうぞお気軽に学修支援センター相談室にいらして下さい。一緒に悩んで考えましょう。



## 伊藤 英之（兼担助手）

**メッセージ** この度、教育開発推進機構に助手として着任いたしました。近年、大学教育における教養体育の選択化が進む中、改めてその開講意義が問われていると思います。教養体育の開講意義を考えながら、本学の教養体育の特色をより活かすためのFD活動について勉強していきたいと考えております。よろしく願いいたします。



そっ たく どう じ  
啖 啖 同時

— 編集後記 —

第3号刊行の運びとなりました。今回は、学修支援センター開設1年を迎えての現状報告や、SAトライアルに参加した学生による座談会という、学生中心の内容となっています。いまや、学修支援への取り組みはどの大学にも必要とされており、本学も例外ではありません。これからも、学生が気軽に相談できる体制作りを努め、学びの"あと押し"をしていきたいと思えます。SAによる座談会では、普段受けている授業に対しての率直な意見交換がなされました。第4回教育開発懇話会では、やはり発足から1年を経過した人間開発学部の取り組みを、新富学部長より紹介していただきました。また、「大学授業最前線」では、神道文化学部の黒崎准教授の授業を紹介いたしました。今後も、本学における様々な教育活動について、情報発信をしていければと思います。（鈴木）